

第1章 高等学校における 発達障害のある生徒への支援のポイント

高校生の時期は、自分と他人と比べたり、自分について深く考えたりすることなどによりアイデンティティが確立されるとともに、青年期特有の悩みを持つ時期でもあります。

発達障害のある高校生は、その障害特性から学習面や生活面に様々な困難さを抱えています。発達障害のある生徒に対して、障害に起因する学習面や生活面での困難さへの理解や支援が十分に行われない場合、失敗体験を積み重ねてしまい、自尊心が傷つき、自己肯定感の低下、長期欠席や問題行動、学力不振などの二次的な問題が生じることになります。

発達障害の特性を有する生徒が、アイデンティティを確立していく時期だからこそ、高等学校での学習や生活において生徒が、成功体験を増やし自己肯定感を高めていける環境を整えていくことが必要です。本章では、高等学校における学校・学級不適應の予防・改善を図る上での指導・支援のポイント等について紹介します。

高校生の発達段階に応じた指導・支援を行う

発達障害のある高校生には、発達段階を踏まえ、「学習に関すること」「キャリアに関すること」「生活に関すること」についての指導・支援が重要になります。

なお、指導・支援を行うに当たっては、生徒の心理的側面に配慮する必要があります。

【学習に関する指導・支援】

学習に苦手意識がある生徒がいます。基礎学力が定着していない場合、小・中学校の内容を指導し、勉強の方法が分からない場合は、自分に合った学習方法を指導・支援することが必要ですが、生徒の年齢を考慮し、自尊感情を低下させないように配慮します。

【キャリアに関する指導・支援】

高等学校段階では、卒業後の進路を選択・決定する力を伸長させることが重要です。高等学校卒業後の進学や就職に関しての情報を、相談や体験を通して十分に提供するとともに、将来について具体的に考える取組が求められます。

【生活に関する指導・支援】

生活上必要なスキルが十分に身に付いていない生徒がいます。気持ちのコントロール、コミュニケーション、学校生活上のルールの獲得について指導・支援することで、学校・学級不適應の予防・改善を図ることができます。

本人が困っていることを理解する

教員は、発達障害のある生徒を「困った生徒」と捉えるのではなく、「困っている生徒」であると理解することに努めることが重要です。

そのためには、発達障害のある生徒の問題となる言動のうち、障害に起因するのはどれなのかを把握します。生徒の置かれている状況や生徒の発言、行動をしっかりと捉え、その生徒自身も「困っていること」が何なのかを理解することに努めましょう。

このことが、発達障害のある生徒を理解する上での第一歩であり、発達障害のある生徒の学校・学級不適應の予防を図るための具体的な指導・支援を考える上も有効です。

発達障害のある生徒を多面的に理解する

高等学校では、学力の向上、不登校や中途退学対策等、多様な課題に関して、どの生徒に対しても一人一人の状況を理解した上で指導しています。

さらに、発達障害のある生徒への指導においては、発達障害の特性を適切に理解することが重要です。生徒は教員が理解している、あるいは理解しようと努めていると感じられることで、安心感を得ることが出来ます。そのことにより、発達障害のある生徒の学習上又は生活上の困難が改善され、生徒自身の自信と意欲が高まり、充実した高校生活が送れるようになります。

なお、一概に発達障害といっても障害の種類や程度は異なります。また、生徒の興味・関心、交友関係、家庭状況等も様々であることに留意し多面的に理解することが大切です。

支援を受ける態度の育成を図る

高校生ともなると、将来に対しての不安を抱き、その不安が恐怖という形として現れてしまうことがあります。また、うまくいかないことを強く認識し始める時期でもあります。

うまくいかないことがあると、自尊感情の低下を招きやすくなります。更に失敗を繰り返すのではという不安を看過してしまうと、成功体験に結びつきにくくなることから、なお一層自尊感情を低下させていきます。

このような自尊感情が低下している生徒に対しては、周りの人たちが働きかけ、具体的な行動や対処方法を分かりやすく指導し、意図的に成功したという経験を積み重ねていくことが重要です。

このことにより生徒は、自分に合った対処法等を自覚するとともに、必要な支援を友達や教員に自ら求めることができるようになります。

このような経験は、将来、自分に必要な支援（合理的配慮）の提供を求め、関係者と適切に合意形成を図ることにつながります。

生徒の自己理解を促す指導・支援を行う

青年期には自分を客観的に見るようになりますが、発達障害のある生徒はその認識が弱かったり、偏っていたりする傾向があり、自分の発言や行動を振り返って、自己を見詰め直すことを避ける場合があります。

そこで、自分の良いところや、これまで自分が頑張ってきたことについて優先して考える機会を作り、自己の良さを理解できるように支援することが重要となります。更に、教員や友達等から肯定的評価を受けることにより、他者が見る自分の姿を受け入れやすくなります。自分のことを分かってくれる教員や友達との関係を深めて自己を再発見することで、「困ったことや苦手なことは、先生や友達に助けてもらえばよい」「自分が〇〇のような発言や行動をすることは自分の一つの側面であり、そのほかにも自分にはいろいろな面がある」など、生徒が自分自身を見詰め直すことにつながります。

適切に評価し、生徒の自信や自己肯定感を高める

発達障害のある生徒が成功した体験を、教員はしっかりと認めて、的確に評価することは、生徒に自信を持たせ、自己肯定感を高める上で必要不可欠です。

更に、生徒の適切な言動等について一緒に振り返りをする 것도重要です。このことを繰り返すことにより、発達障害のある生徒は、自分の言動等に自信を持つことができるようになります。

学校生活において教育相談的対応の徹底を図る

教員が、発達障害のある生徒に対して、日頃から教育相談的対応を意識した指導・支援を行うことは、生徒とのラポールをつくることにつながることから極めて重要です。主な教育相談的対応の視点としては、以下の内容が挙げられます。

【受 容】

行動には感情が伴います。どのような行動をしたとしても本人なりの理屈や思いがあります。「してはいけないことをした。」と承知していても、そのような自分を分かっ
てほしい、受け止めてほしいと思っているものです。生徒が自分の気持ちを受け止めてもらえると

混乱している
気持ちが
整理される。



緊張がほぐ
れる。



自分の気持
ちを見詰め
る。



問題を乗り越え
ようとする力が
生まれる。

というステップを踏んで、問題解決に向かうことができます。

【共感的理解】

生徒の主体的な問題解決や個性・能力の開発を図るためには、共感的理解が大切です。互いに共感できたと感じるには、人間関係が不可欠です。また、共感の体験をもち、理解し合うことで、人間関係は一層深まっていきます。ただし、共感的理解とは、相手の間違っただけの言動を認めたり、相手の言うことを全て正しいと認めたりすることではないことに留意することが重要です。

【自己有用感】

自己有用感とは、「自分の良さを認め、自分を肯定的に受け止めることができる存在感」と定義付けることができます。自分が所属する集団から、承認・称賛・感謝・支持を受けることによって、自己評価を高め、その集団において安定した存在感を得ることができます。また、高校生は仲間や友達からの評価が気になる時期でもあります。友達から承認を受けたり、感謝されたりすることにより自己評価が高まります。こうした友達相互の肯定的な評価が表現できる場や雰囲気のある温かな人間関係で結ばれたクラス作りが大切です。

【かけがえのない存在】

集団に目が向いていると、一人の生徒の存在を見落とすことになりがちです。また、一人の生徒だけに目が向いていると他の生徒をないがしろにするという批判を受け、その兼ね合いに苦労します。集団は、一人一人のかけがえのない生徒によって構成されていることを心に刻み、「自分は大切にされている。」と、どの生徒も実感できる指導を心掛けることが大切です。

【自己開示】

日々の学校生活で、生徒と教員の間で誤解が生じることもあります。「間違っただけ」と気付いたら、躊躇することなく修正する勇気が必要です。教員も生徒も、お互いに自分の誤りを認め合うことで、生徒と教員の関係が深まります。「自己開示」は、正直・率直・誠実・かくしだてのないという言葉で表すことができます。しかし、自分のことを何でも話せばよいということではありません。教員の安易な自己開示は、生徒の信頼を失うことにもつながります。生徒とのふれあいを深めながら、しっかりとした考えをもって、実行することが大切です。

